

ソロモン諸島におけるコンフリクトの歴史人類学的研究

藤井 真一 (人間科学研究科 人類学)

太平洋島嶼部に位置するソロモン諸島では1998年から2003年まで「民族紛争(ガダルカナル紛争)」を経験した。それは、首都ホニアラを舞台に、首都を抱えるガダルカナル島の人びとと、人口最大の島であるマライタ島の人びととの間で生じた争いであったといわれる。オーストラリアとニュージーランドの介入および治安維持を目的とするソロモン諸島地域派遣団(RAMSI)の駐留によって紛争は沈静化した。が、現在もまだ緊張状態が続いている。

本調査では、(1)「民族紛争」からおよそ10年を経たソロモン諸島において、現地の人びとがどのように紛争後社会を構築し、紛争後社会の中で生活しているのか、(2)「民族紛争」が現地の人びとに対してどのようなインパクトを与え、10年あまりを経た現在、彼らがどのように紛争を振り返るのか、という二点について、参与観察およびインタビューを行なった。

本調査から得られた結果は以下の諸点である。第一に、紛争後社会の構築のためにオーストラリアを中心とする治安維持部隊(RAMSI)が駐留することによって、大規模な武力衝突の勃発が阻止されているだけにすぎないとソロモン諸島に暮らす人びとが考えていること。第二に、急激な生活スタイルの変化(コメの栽培技術の移転、固定電話も持っていないのに携帯電話が普及するなど)とそれに伴う物価の高騰で、紛争後社会の経済が低迷していること。第三に、ガダルカナル紛争は決してガダルカナル島民とマライタ島民との間でのみ争われたものではなく、極めて多様で重層的なアクターによって担われていたこと。本報告では上記諸点を通して紛争後社会の現状と課題を提示する。

- * 調査地 : ソロモン諸島国・首都ホニアラ
- * 調査期間 : 2009年10月3日から11月28日までのうち56日間
- * 調査方法 : 文献収集および参与観察、インタビュー

キーワード ソロモン諸島、ガダルカナル紛争、マライタ島民、土地